

名古屋→西アフリカ 児童の善意届けます

西アフリカの内陸国ブルキナファソの子供たちに机と椅子を届ける名古屋の小学校の取り組みに、商船三井は自社コンテンツサードスでの無償輸送で協力を申し出た。残る課題は陸送。そこに複数の企業から支援の手が差し伸べられ、輸送のめどが立つ。日本、ブルキナファソ両政府機関の後押しもあり、2011年2月、バンニングされた貨物は名古屋港で船積みの日を迎えた。

昨年日月、商船三井はブルギナフ・アソへの貨物輸送協力を決定した。サレース砲弾外となる名古屋・根子、女學園付風小から名古屋港まで、西アフリカの港酒から現地パンフォーラまでの陸送手段確保の必要性を申し送りする中、12月にコートジボワールの情勢が変化した。有望視されていたアレジャン港經由の鉄道輸送に不安が生じた。

「鉄道はリスクが少ないと考えていた」と、ルートを検討した経営企画部CSR・環境室の加賀田英子氏は悩んだという。だが、駐ブルキナファソ日本大使館経由で取り組みを聞いた業者が、輸送協力を申し出た。西アフリカを得意とするフォワードのマリノロジスティクス（東京都）は、日本から同国への支援米輸送でトラック搬送の実績があり、ガーナ・テマ港経由時の輸送協力を快諾した。また、付属小から名古屋港への陸送も、地元大手の名港海運（名古屋市）が支援することが決まった。

商船三井 ブルキナファソの懸け橋 下



校内では輸送にまつわる
情報を張り出した（桐山
女学園付属小提供）

CSR・環境室の
永田室長

複数企業支援の輪

パンシクされた貨物は2月17日、名古屋港でついに船積みされた。香港と土ロッコ・タンジール港の2度の積み替えを伴う、引き渡しまで2カ月半にわたる国際輸送が始まった。

■ 自覚新た

ルに對ては本船は出港した。そして3月11日、東日本大震災が発生。荷主企業への被災や港灣の損傷、原発事故など未曾有の大災害の中、日本は極度の混乱に陥った。

ルギナフソ日本大使杉浦勉の出席の下、同市アウニール小学校で引き渡し式が開催された。

商船三井も全社停業しての震災対応を余儀なくされたが、そうした中でモロッコ・タンジール寄港が近づいた。多忙を極める中で輸送ルートを最終決断、テマからの陸送をマリノロジスティックスに要請した。

の永田昭一は、今回の無償輸送について「(貧困の撲滅や普遍的初等教育の達成を目指す)国連ミレニアム開発目標への貢献に資する活動」と位置付ける。

一方、輸送が殆ど、児童たちの関心も一気に冷まった。そこでCSR・環境室は、輸送に使う本船のデータや運航状況、海城問題が絡くアデン湾近海を経由する航路などの資料を送った。児童たちに少しでも海運を身近に感じてもらいたいという思いからだった。

百戦活動となった」と振り返る。人々の営みがグローバル化する中で「人々の生活や社会を支えていくために、これからも船というリソースをうまく使って応えていきたい」と意気込む。

同小では、模造紙に描いた世界地図に、机と椅子を積んだ船の現在地や経路などさまざまな情報を書き込まれ、校内に張り出された。それを知った加賀田は「シッパーの反応をじかに聞くことは少なく、新鮮だった」と、観望人としての自覚を新たに持ったという。

や医療車両、中椅子などの海上輸送に協力してきた。水田は「今回は一本の電話からプロジェクトが始まった。今後は受け身だけではなく、積極的に働き掛けるようなこともしていきたい」と話す。

4月1日にタンジールを出航し、週明けにマダガスカルへ。その後トラックで送送、5月5日にバンフォーラ市に貨物は到着した。6月20日、駐ブ

（文中敬称略）